（タイトル）丁寧なくらし

（応募者名）私道　かぴ

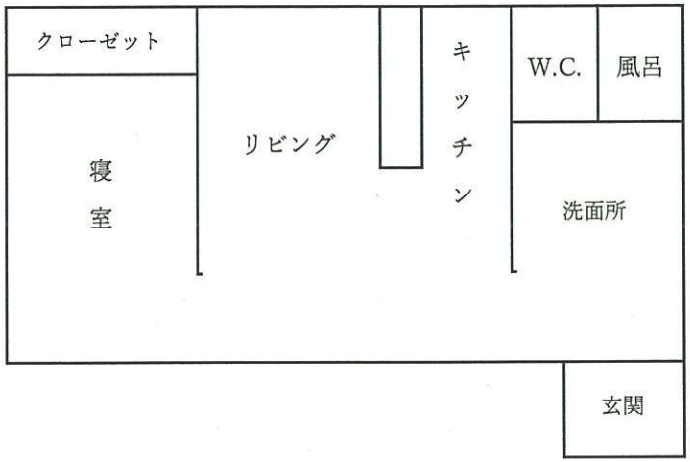
丁寧なくらし

この戯曲は、身体感覚を舞台上に再現するものである。
物語は基本的に身体の動きによって進行する。
どの部分を発語で表現するか、また、しないかは都度役者の身体性によって決まる。

◆場所…物語は家の中を移動しながら進行する（回想部分は「記憶の部屋」と表現）
◇主体…その場面において表現される身体部分

【登場人物】
くらし
※「◇」で示された部分に随時主体が移っていく
◇上半身
◇目
◇手
◇下半身
◇口
◇全身
◇足
◇腹
◇顔
◇歯
◇頬
◇指
◇髪
◇口内
（記憶の中）
整体師
コアラ
母
ある人
水が苦手なあの子
担任
養護教諭
歯科医
歯科助手

【見取り図】
※「記憶の部屋」は随時指定される



【序章】
「くらしは今朝起きてすぐ決断をした。これからは、目の前の一つひとつを見過ごさずに生きていくことに決めた」

【第一章】
◆ベッドの上≫寝室
◇上半身
頭の上にひょんとした寝ぐせを据えながら、羽毛布団から上半身を立て直す。
綿の粒の細かいほこりがむあっと舞ったのが見えた。
◇目
目をしばたかせると、視界の隅に軽い違和感がある。
爪で目の端をこすると、かつて涙やほこりだったものがぽろりと結晶のように剥がれ落ちた。それを手の平に転がし見つめ、不純物として異常がないことを確認し、再びまぶたを閉じる。
そのまま視線をそらさずに、首を光が差す方へ向けていく。眼前がますます赤くなって、今日はどうやら天気がよいらしい。この辺り、というところでまぶたを上げると、はるか遠くの光がまっすぐに瞳に届いた。

◇上半身
少しずつ範囲を広げていくことにする。
まず、両腕をまっすぐに天井へと突き上げる。腰のあたりから肩にかけて筋肉が徐々に稼働していくのがわかる。「ぱき」と、右肩から骨の鳴る音がした。そのまま左手で右の手首をつかみ、くーっと左側に引っ張ってくる。右も同じようにした。次は腕だけでなく、脇から腹にかけての皮膚も共に引き延ばされているのがわかる。

◇手
「ふうっ」
力を一気に抜くと、腕は、まるで自分の付属物ではないかのように、どさっと布団の上に落ちてきた。力を失った両腕はなさけなく手のひらを上に向け、だらんと緩んでいる。
その姿を見つめながら、手のひらをゆっくりと前方に向けた。爪がこちらを見ている。少し短すぎるくらいに、指の先の肉にあわせてギリギリまで切りそろえられた几帳面な爪。まだ朝をうまく呑み込めていないようで、全体的に白っぽくくすんでいる。その指先で、伸ばした足の先に触れるように、くらしは上半身をじわじわと前方に倒した。

◇下半身
ふくらはぎあたりにぴりっとした張りを感じる。滞っていた流血が再開されたのだろうか。すわーっと、足の裏側に心地よい開放があった。続いてぎゅ、ぎゅと手で自らのふくらはぎを掴む。比較的弾力のある肉の感触。
下から上へと手を移動させるうちに、すねというのは随分偏ったつくりになっているのだなということに気付く。骨が、肉の真ん中ではなく頂点についているような構造。

◆記憶の部屋
◇全身
「ストレッチをした方がいいですね」
と言ったのは整体師だった。相当凝っていますね仕事ですか、とそのがっしりとしたしなやかな腕で、くらしの腰の筋肉を緩やかに上下させながらその人は言った。くらしは、仕事、いったい仕事ってどこまでのことを言うのだろう、移動中は仕事に入るだろうか、食事中は、寝ている間は果たしてどうだろうと思いながら「はい」と返事をした。実際、くらしの腰痛は眠っている間に出現したものだったので、睡眠も大きく見れば人間の仕事のうちなのかもしれないと思うようにした。
「左半身に重心をかけてしまう癖があるのかもしれませんね、左側が凝っているので」
その人はそう言ってくらしの左腰を親指でぐい、と押した。へえそうなのか、と思ったのでくらしはそう言った。そして考える。
生きていると、自分以外の他人が、自分よりもこの身体を詳しく判断し、状態を教えてくれ

るということがしばしばある。「左側が凝ってますね」とか、「ちょっとアレルギーですね検査しますよ」とか、「深刻な病気ではなくただの風邪です」という風に。いずれにしろ、言われてみて「ああそうですか」と言う割に、自分はそのことに心から納得しているわけではないように思う。「あなたの身体はこうですよ」と言われたところで、「靴ひもほどけてますよ」と言われたくらいの心の動きしかない。

自分ではない誰かが、誰かの方が、むしろ自分の身体の動きや性質を知っているということ。まるで身体が自分のものではないような、付属品でしかないような、生まれながらにして何かを任されているような、心もとない気持ちになる。

◆ベッドの上≫寝室

◇下半身

揉むことでじんわりと温かくなってきたふくらはぎを通り越して、もう一度足先に指で触れるよう前方に倒れた。先ほどよりも比較的スムーズに足先に触れる。心臓からこんなにも遠い場所に、いつだって血液が届けられていることを不思議に思う。

「んー」

くらしはベッドの脇にとん、とんと両足を垂らし、そのまま体重をかけてすっくと立ち上がった。

◆記憶の部屋

◇全身

この時にくらしが毎朝思い出しているのは、いつか動物園で見たコアラのことだった。普段は木の上にいるはずのコアラが、あの時はなぜだか、おそるおそる木から降りてきて、両足を地面に着け、すっくと立ったのだ。その時の、こわごわと両手を離したコアラの姿。立つ、というのは身体を立て向きにするだけの運動ではない。両足で地面をしっかと踏みしめ、徐々に身体の体重を二本の脚に任せていき、慣らし、最後には手で空をしっかと掴む。それがすべて果たされてこその「立つ」という行為なのだ。

くらしは人間だったので、コアラほど恐れることはないものの、きっと数十年後にはあのコアラのように立つことがひとつの冒険になる時が来るだろうと思った。その時のことを、今は考えてもどうにもならないので毎日そっと隅に置いてやり過ごしている。

【第二章】

◆キッチン

◇足

歩き出す。冷たいフローリングの床が、ぺたぺたと足の裏にくっつく感じがした。意識したことはないけれど、大概くらしは左足から歩行している。寝床から歩いて十二歩で着くその一角で、おおよそ右足が前に出た状態で立ち止まる。

◇手

まずはここから始めよう、とくらしは思った。流しの隣の台から、二度寝する前に沸かしておいたポットを手に取る。それは手に取りやすいように、取っ手の部分が丸みを帯びた構造になっていて、人間が愛着を持ちやすいような形というのはこういうものではないかと思う。その取っ手をじわじわと傾けながら、触るとまだほんのりとあたたかい、しかしもう随分水になりかけた白湯をコップに注いでいく。くらしは再びじっと感覚を傾けた。

ぬるい白湯の垂れる先にコップ、そのガラスで形作られた美しい塊を置き、注がれる流れを遮断する。一通り貯めてからポットを置き、片手に納まったコップだけに集中する。液体を扱うときはいつだって人間は少し恐れている。

◇口

コップを顔の前に持ってきてからおそるおそる口の方に傾け、舌に乗せ、そのまま中身をつつとのどの方へ流し込んだ。続けていくと、むせる気持ちが限界になって、喉が空気の通り道を瞬時に閉じる。ぐぐっと押しやられた水はそのままのどの奥を伝い、食道を流れて胃にととん、と落ちた。胃の底がじんわりと温まる心地がした。

◆記憶の部屋

◇全身

かつて、およそ二十七年前、この身体が外気に触れる前まで漂っていた水中の温度を思い出そうとする。お腹に手を当てると、ぐにゃりと熱い肉の感触があった。きっとこうした肉の中にあったその水は熱く、濃く、この身体にまとわりついていたのだと思う。そして、それを押しのけ、もがき、全力で身体をくねらせ、くらしはこの世界に生み落とされのだった。誕生を掴み取ったのだった。ただし、それはすべて記憶の中で。けれど確かに、かつてこの身体が体験したことだった。

あんたは逆子だったから、という言葉をよく聞いた。くらしは自分を逆子だと思って生きたことは一度もなかったから、そう言われてのち人にその意味を尋ねたりした。さかご、それはね、お腹の中で頭が下になってしまった赤ちゃんのことだよ。

なってしまった、下になってしまった、そう何度も唱えていると、なにかとんでもない間違いを犯したような気持ちになってくる。自分はなぜ、逆さになってしまったんだろうか。逆さになってしまおう、と思うような何かがあのお腹の中であったのだろうか。そう思いさえしなければ、あの人の下腹にあんなに大きな切り傷を残すこともなかったのだろうか。

◆キッチン

◇腹

腹に手を当てていると、ぐるる、と獣のような音で空気の移動が告げられた。胎動はこん

な感じだったのではないかと思う、そう思いたい。ぐるん、と地球上で一周してしまった、いつかのこの身体のこと。その先につながっていた、もっともっと大きな外側の身体のこと。太くどくどくと波打つ管でその身体から栄養をもらっていた頃は、こうして「お腹がすいた」と言う感覚もなかっただろう。好きな時に栄養が、口を動かさずとも体内に流れ込んでくる。でも、それは食事なのだろうか？

空腹、という気持ちを素直に見つめると、それは思っているよりも大味なものだと気づく。お腹がすいた時、お腹がすいたというそれ自体が苦痛なのではないということを、くらしはこうして意識するまで知らなかった。空気が腹の中を移動し空腹に気づくこと、気づいてしまうと腹の中には、立った少しの空気しか自分を満たそうとしているものがないということを知る。その不安。胃液が空気にぐっと押し上げられ、食道を刺激する。頭がぼやっとして目の前が白く靄がかる。手先が冷たくなり、かたかたと揺れ始める心地がする。きゅっと拳を握るつもりが、雲をつかむようで指に力が入らない。

◇足

ひとまず何かを口にすることにした。フローリングの、ぺたぺたという感触を足の裏に感じながら、また四歩歩く。今、この足を置いている加工された木々も、昔は縦向きに生きていて、耳を当てればわかるほどの勢いで音を立てて地面から水を吸い上げていたのだった。そのことを思うと、いつか切り倒され、短く切り刻まれ、細く加工され、ニスなどで表面をひょぺたぺたと機嫌よく塗られたこの木の運命について何だかもっと真剣に考えなくてはいけない気がする。それを安易にぺたぺたと踏みつけている自分の足が、どんどん冷酷なもののように思えてくる。

【第三章】

◇手

左足がコンロの前に差し掛かると、右手でつまみを掴んで回した。軽く引っかかるような感触の後、ぅっつと自らを鼓舞するかのような音を上げて火が灯る。その青色を確認しつつ、つまみを調節して炎の色形大きさを整えていく。

◆記憶の部屋

◇全身

「朝はスープがいいよ」

と誰かに言われた。いや言われたのだったか、誰かが書いたのを読んだのだったか、誰かがしゃべっていたのを聞いたのだったかは定かではないが、「食材そのものをそのまま取れて、負担のない」形としてのスープという料理がやたらと朝食に推奨されたことがあった。それを鵜呑みにしたわけではないけれど、くらしはその「スープ」という料理の姿形から、この食べ方が確かに朝食に一番適しているのかもしれないと思った。離乳食とか病院食に

似たそれが、毎日を始めるのに、食をまた今日も経験するという気持ちをくくるのに丁度よいと感じたのだ。

昨夜のうちに個体から液体になった野菜たちは、とろとろとしていながらもまるで本来の姿へ戻る途中かのように鍋の中でぎゅっと身を固くしていた。そこに少しずつ火を与え、また再びやわらかくなれるように状態をほぐしていく。いんげん豆ととうもろこしのスープ。名前を並べるとそういう食べ物になってしまうが、実のところ確信を持ってそう呼べたことはまだ一度だってない。

スープ、というものについて、くらしはついこの間までこれを食べ物と呼んでいいのか確かな気持ちが持てないままだった。豆を一つひとつもいで器に集結させている時の単純さ、それを一瞬にして粉砕してしまうフードプロセッサーの残虐さ。固形で生まれたものはそのまま食べるのがよいのではないか、いんげん豆だって、その丸の中に消化や吸収なんかの機能がある部位があったはずだし、そちらからしても生まれてきたままの形がきっといい、ありのままの姿でいただくのが一番敬意のある、尊厳のあるいただき方なのではないか、そう思うと、思い始めるとどうにも不憫に思えてならなかった。

しかし、あるレストランで何気なく出された一皿、まるでいんげん豆をそのまま食べるよりもずっといんげん豆なそのスープをいただいてから、これは決して惰性ではなく、生まれるべくして、誰かが強い意思を持って作り上げた食べ方なのだということを知った。そう信じられたし、自分もその信仰に乗りたいと思った。

スープだけをひいきにすることさえ辞めてしまえば、冷静に考えることができる。思えば、刻んで砕いてどろどろにしたものだけがおかしいのではなく、例えば切り開いたり、皮をむいたりすることだって自然ではないのだった。自然とは？混ぜ合わせたり、部分的に捨てたりして食べているものもある。そのことを甘んじて受け入れて、何百回何千回と繰り返して、私たちは食べることを正当化していかなければならない。

◆キッチン

◇顔

それまではすん、とスプーンが垂直に立ちそうだったスープの表面がやわらかくなってきた。水蒸気に混ざったまろやかなにおいが漂う。いんげん豆の青臭いにおいと、とうもろこしの主張しない甘い風味と、それを丁寧に薄く伸ばした牛乳のまろやかな香り。くらしは鼻から少しずつ空腹が和らいでいくのを感じながら、鍋の中を数回大きく掻きまわし、のぞき込んだ顔にその湯気をまんべんなく当てた。湯気で皮膚がやわらいでいく。

◇手

スープが完全に液状になったのを確認して火を止めた。鍋の中身をとっぷりと底の深い皿に注ぐ。スプーンをその中にゆっくり差し込むと、少ししてからカチャ、と皿の底に触れた音が静かに響いた。

◆机≫リビング

皿をほんの少し震える両手で持ち、くらしは音を立てずにリビングへと移動した。リビングの中央に配置された木製の机の上に、静かに今朝の一品を置く。椅子を左手ですっと引くと、左手に加工された木のつるつるとした感触が残る。

◆記憶の部屋

◇全身

家具というものが、当然のようにそこにあるものではないということに気づいたのは一人で暮らすようになってからのことだった。生まれ育った家には、当たり前に椅子や机、それに棚なんかが暮らしていた。まず、世界には家具があった。生まれたてのくらしは椅子をベッドにできたし、机の下で秘密の遊びを始めることもできた。その椅子が、机が、だんだんと色を変え、傷をこしらえ、おまけに体重をかけると軋むようになった頃、くらしは一人でその家を出た。そして、一人で暮らす部屋の扉を開けて初めて知った。そこには、何一つ家具がなかったのだ。その場所にはぽかんとしたただの空間と、仕切りがあるばかりだった。くらしは悟った。あの家にあったものは、自分以外の誰かが、自分が生まれるよりもずっと前に選んであそこに取り入れたものだったのだ。あの椅子が、机が、私を拒否せずに受け入れてくれたのは、私がその手を触れるずっと前から自分以外の人に愛でられていたからだった。そうやって自分は、いつだって自分以外の誰かの生活にお邪魔しているだけだったのだ。

◆机≫リビング

◇手

くらしは今スープ皿を置いている机の表面をゆっくりとなぜる。木目に沿って左から右に移動すると、徐々に心が穏やかになった。

◆記憶の部屋

◇全身

今ここにあるものは、すべてくらしが選んだものだ。細々とした値段や身の丈に合った家具を揃えていくうちに、正真正銘自分が一から作り上げた、それでもどこかで見たような部屋が出来上がった。自分の生活が始まると、未知のことにたくさん気づくようになる。例えば、毎日同じ動きを繰り返す度、目にははっきりと見えないが何か明確なルートを辿るようになっている身体のこと。寝室へはこの扉の取っ手の、少し上の方を触って入る。手洗い場では必ず鏡の斜め左に落ち着いて立つ。急いでいる時は、リビングの机の右側すれすれを腰を添わせるようにして通り過ぎ、台所へ移動する。その視線の先や高さは毎日ぴったり一緒だった。繰り返して繰り返して違和感がなくなった時、くらしは初めてこの家のすべてが自

分の生活に「間に合った」と思った。

◆椅子≫リビング

◇全身

椅子に座ると、視界がほんの少し低くなる。背の高さにして小学校高学年の視線と同等だろうか。改めて考えてみると、椅子に座るというのは実は複雑な運動だ。腰を下ろす、と言う言葉があるように、腰が先に動いているようで、その前にはひざを折る動きが必要だし、その直後に少し前かがみにもならなければならない。椅子の板にうまく着座できれば、お尻の肉がむに、と上から体重を押し付けられた感覚があって、やっと座れたという実感を持てる。しかし、座ったからと言って身体が休まっているわけではない。力を入れすに済む部分があるということは、その分他の部位に負担が移行していることでもある。生まれ落ちてからずっと、身体は完璧に休まったことなど一度もないのだと思った。

◆机≫リビング

◇口

くらしは机の上にひじをそっともたれさせ、右手でスプーンを持ち、左手はお皿に添えて食事を始めた。一口すくって、そのまま真っ直ぐに口の方に寄せてくる。唇の内側に流れ込ませたスープを、口内に広げすぎないまま舌でのどの奥へ運ぶ。その時耳に届くのは、ほんのり咀嚼する度にかち、かちとやわらかく歯と歯があたる小さな音だった。

◆記憶の部屋

◇全身

「スープだから別に噛まなくてもいいのに」といつかのレストランである人に言われたことが頭をよぎる。しかし、くらしにはわからなかった。その人が「スープ」というものを信頼しているのか、それともそれを「調理した人」を頼りにしているのかが定まらなかった。「スープ」と言う名前が付いているからって、それを丸ごと真に受けて胃に流し込んでいいものだとなぜ言い切れるのだろう。くらしは、怖かった。たとえそれが丁寧に裏ごしされたものだとしても、それをしたのが名のあるシェフだったとしても、自分で確かめて体内に入れたかった。

◇歯

歯で何度も区切りながら、その危険性を限りなく薄くして、飲み込んでいく。いつだって、誰が作ったどんな料理だってそうだった。たとえ自分一人しか変わっていない料理だったとしても。だから、くらしの食事では、どんな時でも上の歯と下の歯が軽く立てる音がBGMになっていた。もっと注意深く耳をすませば、あごの辺りの骨が動くかすかな音も感じられる。肉体の中の骨の音色と、食器があたるかちゃかちゃという無機質な音が食卓に響いた。

◆机≫リビング

◇目

スープの中から最後のひとさじをすくい上げた瞬間、ざっと外から陽が差した。ぎゅん、と黒目が小さくなって、視界が少し揺れる。眩しさ、というのは光の惑わせ方のひとつだ。視線を卓上に移すと、さっきよりも食器の色が白っぽく食卓に映えていた。最後のひとさじを飲み尽くし、目を細めて顔を上げる。空腹に苦しまずに過ごせる程度に胃が満たされれば、満腹でなくてもくらしは満足だった。

【第四章】

◇頬

ほんの少し開いていた窓から、風がすっと部屋の中へ入って来る。部屋の大きさに合うように切り取られたその風は、適量に調整されてくらしの頬に届く。目にはうまく映らないほど細かく、そしてびっしりと顔全体に生えたうぶ毛が一斉に風を受けて波立った。頬に触れると、睡眠から目覚めてまだぼんやりとしている肌が油分を含んで指に吸い付いてくるのがわかった。くらしはゆっくりと立ち上がる。

◆キッチン

◇手

ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ、と水が一滴ずつ溢れるようになってしまった蛇口を見つめながら、水栓を右にひねる。ざあ、と勢いよく水があふれ出た。いつか空に吸い上げられ、水蒸気の塊として貯められ、地上にじゃんじゃんと降り注いでここまでやってきた、その水の実演を今目の前で見ている。その流れの先に食事の断片が残る食器を置き、長い水の度をしばし遮断する。みるみる器いっぱいになった水はたちまち溢れ、シンクにはねて排水溝に吸い込まれていく。しばらくその様子を眺めてから、くらしは意を決したようにキュッと強く水栓を締めた。ぷつん、と流れが止まる。いつもここで不思議に思う。今遮断された水の続きは、一体どこへ行ってしまったんだろう。

◆洗面所

◇手

例えば先ほど止められて、流れる行き場をなくしてしまった水が家の中を回って他の場所に出て来るとしたら、次はここなのではないかと思った。キッチンから七歩歩いた先の洗面所でくらしはもう一度勢いよく水栓をひねり、流れの下へそっと両手を差し出した。手の平を上に向けてほんのりと器の形にすると、水はみるみるたっぷりと溜まっていく。最初こそ冷たく感じたものの、手から水の流れ出るのをそのままにしておくと、皮膚がやわらかくなって徐々に慣れてくる。段々とそのひんやりとした刺激を心地いいものとさえ感じるの

だった。

くらしは手の平溜めた水を、できるだけこぼさないようにゆっくりと顔に近付けた。息を止め、手のひらを顔に密着させる。皮膚に水が吸い付いて、そのまま落下し排水溝に飲み込まれる音がする。息を大きく吸う。もう一度、手の平に水を溜めて顔に運ぶ。息を止める。この息を止める瞬間、よくよく意識するといつも少し緊張している。次にまた息継ぎが再開できるかどうかについて、本当は心のどこかで不安に思っている。パシャ、という音を上げて顔から水が散っていくとき、心地いいのは息ができる安心がやってくるからだ。毎日洗面所で、くらしは少しずつ水の事故を乗り越えていると思う。

◆記憶の部屋

◇全身

「他の習い事は何もしなくていいから、水泳教室だけは通って、ね」

幼い頃、母の顔が目の前にあって、自分にそう告げたことを確かに覚えている。その表情をよくよく思い出そうとする度に、くらしは今でもひどい不安に襲われた。水泳だけは。命にかかわることだから。うんと大人になっても、いつまでも大切な技術なんだから、ね。

ぎじゅつ、というのを当時はよく理解できなかったけれど、水泳というものを苦手にしてしまうときっと今後生きていく上で大変なことになるのではないかと、あの時確かに予感した。だから、怖いという気持ちをずっと奥底にしまい込んで、見ないようにしてうまくやってきた。泳げると、大人が喜んだ。進級すると、誇らしげな視線がくらしを包んだ。

ただ、くらしは、自分がたまたま運よくできただけだということにも気づいていた。水泳教室でいつまで経っても水面に顔をつけられなかった、あの子のことを思い出す。水にぽちゃんするだけ、少ししたらパッて顔を上げて息をすればいいからね、ね。何も怖がることはないから。少し苛立ったような先生の声と、しゃくりあげるあの子の泣き声。でも、今ならわかる。正常なのはあの子だったのだ。一瞬でも自分の身体が危険にさらされることを、ああやって怖がるのは本当に正しいことだったのだ。無理やり適応したフリをして、でも結局いつかは水に適応できないまま溺れさせてしまうだろうこの身体のことを考えた。

◆洗面所

◇顔

くらしはきゅっと水栓を強く締め、流れを止めた。手の届く範囲に設置してある棚からタオルを手に取り、すばやくそこに顔を深く沈める。柔軟剤の人工的な「よい香り」と、その奥にかすかに残る陽のにおいが鼻孔をくすぐる。深く吸い込めば吸い込むほど、お腹の辺りが大きく膨らみ、萎むのがわかった。もう息継ぎの心配はないよ、と誰かがささやく声がする。自分が息をしていることを実感して、深く安心する。

顔を上げると、少し白くなった自分の顔が写し出されていた。洗面所にある鏡は家の中にある鏡の中でも最も大きい。くらしは何度見てもこの装置に驚く。正面に写っている瞳が、

自分のものだという確信を持てたことが全くない。目の合うその人はいつも、同じ目線をしているようで実は全く違うものを見ていると思う。タオルに水を吸われて油分が飛び、少し突っ張るように引き締まった肌を見る。

【第五章】

◇手

鏡横の棚にそっと手を伸ばした。程よい重さのある容器を手に取り、丸いふたをからからと一方向に回す。回し切ってフタを開くと、中からもったりとした質感の白いクリームが顔をのぞかせた。左手に容器を持ち、右手でクリームを適量すくってから、くらしは鏡を真っすぐに見据える。見慣れた顔、だと自分が思っているものがそこにあった。

クリームの説明書きには、「油分や乾燥が気になるところに適量なじませます」と書いてある。くらしは書かれている通りに、慣れた手つきでその個体と液体の間のような物質を顔に薄くのばしていく。

毎日のように繰り返している行為ではあるものの、最初に持った疑問はずっと心に持ったままだった。「油分や乾燥が気になるところ」の「気になるところ」の主語がうまくつかめない。自分が気になるところに、という意味だろうか。それとも、自分が自分の顔を確認できないすべての時間のために、つまり「他人の」気になる部分を想定してクリームを塗った方がいいのだろうか。

◇頬

皮膚の上にある微かな違和感に目を凝らす。左頬のある一部分を、指で軽くなぞる。そこには意識すれば認識できる程度のかすかな傷跡が残っていた。

◆記憶の部屋

◇全身

小学校のあの時、くらしの頬に傷が刻まれたことに真っ先に気付いたのは担任の先生だった。その人は左頬から血をぽたぽたと流すくらしを見て小さな悲鳴を上げた。そして、手を引っ張って保健室に連れて行った。先生の大きな歩幅に続くのはなかなか大変だったけれど、引っ張られていたのでその速さについて行かざるを得なかった。扉を開けてその傷に気付いた養護教諭は、小さく息を飲んだ。一瞬笑顔が引きつったのがわかった。そしてくらしの小さな体をくるくる回る丸い椅子に座らせ、血を拭き取ったり、薬を塗ったり、ぴったりのテープを探したりと忙しく働き始めた。担任は「竹ひごが」とか「気が付かなくて」などと話していた。そして、「痛くないか」や「誰にやられたわけでもないよね」などと質問を重ねた。養護教諭と担任は並んでくらしの方を見つめ、「かわいそうに、跡が残らなければいいけど」や「顔だから、これぱっかりはねえ」「大人になった時に困らないように」と続けた。くらしは二人を目の端に眺めながら、心配しているようで、心配されているのは自

分ではないと強く思った。
鏡の前のくらしは、すっかり薄くなった傷跡に何度も薄くクリームを塗り込みながら、将来のために、と思う。そしてはたと気づく。今の自分は、あの人たちが言っていた将来の私の姿なのだろうか。それとももっと遠く、自分でも想像もつかない「将来」を、大人たちは見ていたのだろうか。

【第六章】

◆洗面所

◇口内

口を開くと、鏡に口腔内が見えた。ずっと奥の方、暗い部分にてらてらした桃色の部分が見えた。ぷっくり膨れていたり、つるんと丸まったりと場所によって少しずつ作りが違うのが確認できる。顔の角度を変えると、洗面所の灯りを反射してそれらは時折ぬらっと光った。内臓を取り出してみたらきっとこんな感じなんだろう、とくらしはいつか見た胃カメラの画像を思い出す。

口腔内の下部分に目をやると、向こうの方から赤い舌がすっとこちら側に伸びている。目で先端まで追ってから、舌の先を左右にちろちろと動かしてみた。柔軟に、そして軽やかに動く舌を見て、なんだか別の生き物のようだと思う。少し視点を引いて眺めると、口腔内は身体の中でも特に不思議な部分だとしみじみ感じられた。体内と外界が接触している。

◇歯

じっと中を見続けていたら、唯一白色の鮮やかな列がぼーっと浮かび上がってくる。上下に半円を描くようにずらっと並んだ歯列。その中の一つ、右上の奥から二番目の歯が、銀色にキラッときらめいたの視線がとらえた。

◆記憶の部屋

◇全身

一人で歯科に行くようになったのは一体いつ頃からだったのだろう。気付けば自分で予約を取り、医師に病状を説明し、説明を受け施術を承諾し、料金を払うというすべてを自分が担うようになっていた。しかし、思えば、それまではそのすべてのことを自分以外の大人、主に親が務めていたのだと思うと改めて不思議な気持ちがする。

この身体の横で、この身体の持つ歯の痛みについて説明する親の声を思い出す。…ええ、数日前から食事の時に歯が痛いと言い出して、はい。歯磨きは、朝と夜の二回、あ、でも多分お昼に保育園でも先生が歯磨きをさせてくれていると思います。お菓子…そうですね、チョコレートとか飴とか、最近特に甘いものを好むようになってしまって。私がもっと注意してあまり与えすぎないようにしないといけなかったんですけど…。

この身体が菌に蝕まれていることについて、自分以外の人間が謝罪している。この身体を

うまく管理できなかったことについて、そして、身体を生まれた時と同じように健康に保って未来に引き渡せないかもしれないことについて。

「右の奥歯に詰め物をしたのは、どの位前だったか覚えていますか？」

かつて自分が付き添いなしでは歯科に来ることができなかった事実なんて遠い昔になったある日、年配の歯科医がくらしの歯をのぞき込んでそう聞いた。

「虫歯ですね、結構進行しているので抜いてしまってもいいんですけど、ぎりぎりまで削って詰め物をするという手もあります。どっちがいいですか？」

それまで誰かが責任を負っていた身体が、ぽん、と急に押し出され、自分の管理下に入った気がした。自分の失態でできてしまった欠陥の責任を、初めてきちんと取れと言われたのだと思った。

「自分の歯を残したいので、詰め物にしてもらえますか」

と返事をした時の、歯科医の少し迷惑そうな表情をくらしは見逃さなかった。「詰め物の範囲が大きすぎるので、食事中に外れる可能性も高くなります」という医師の言葉に、くらしはそれでもいいです、と答えた。「詰め物の間からまた虫歯ができることもありますよ」という言葉にも、いいですそれでも、と答えた。そしてごりごりごり、と鈍い音をよく頭に響かせて、身体の中のたった一本が削られ、それによく似た成分が新しく身体の一部になった。

施術後、歯科助手が「歯磨きの練習をしましょう」と言い、くらしに歯ブラシと小さな手鏡を持たせた。歯の根元にブラシの毛を一本一本添わせること、力を入れずゆっくりと左右に動かすだけで汚れは取れるということを丁寧に教わる。くらしは、おそらく子どもの頃に習得しなければならなかった内容を今になってまだ練習しなければならないという羞恥心よりも、なぜか納得と安堵の方が深く心に残っていた。歯の磨き方を、きっとくらしは、おそらくどこかで、生きてきたいずれかの時間で教わったのだろうと思う。しかしその時間がいつあったのか、果ては本当にあったのかさえ全く思い出せないのだ。「このやり方で、毎日歯磨きをがんばってください」と歯科助手がその工程の終わりを告げた時、くらしはひどくほっとして、その姿はもうほとんど泣き出しそうなくらいだった。

くらしは初めて心の奥底から、身体の芯から深く納得した。身体は誰に任せられるものでもなく、自分自身で管理するものなのだ。そのやり方を知っている前提でこの身体はずっと稼働してきたのだ、今までずっと生き続けていたのだ、ということを、ぴかぴかに磨き上げられた最新器具が並ぶ歯科でくらしは人生で初めて完全に理解したのだった。

◆洗面所

◇口

しゃかしゃかしゃかという刻みよいリズムで口内に限界まで泡を溜めてから、蛇口から勢いよく流れる水に向かって一直線に吐き出す。白い泡はそのまま跡形もなく暗い穴に消

えていった。もう数千回と繰り返したであろうその身体管理の務めの終盤に、くらしはやっと着替えに取り掛かることになっている。

【第七章】

◆クローゼット≫寝室

◇手

洗面所から十四歩先にあるクローゼットの前に立ち、観音開きの扉を両手で開いて風を受けた。銀色のハンガーに行儀よく下げられた服をひとつず確認するように手で左から右へ寄せていく。

ざら、という手触りの生地に触れて、くらしは思わず手を止めた。服の裾部分をそっとつまみ、人差し指と親指を交互に動かす。ざらざらざら、と指の皮膚に生地がこすれる感触が心地よい。麻。次に左の衣服に移り、同じように指を動かす。つる、つるという滑らかさを感じる。ポリエステル。くらしはその隣も、その隣の生地も同じようにした。ウール、綿、ポリウレタン。

その時の指に一番なじんだのは麻だったのでそれを引き抜く。くたびれた就寝時の衣服は、身体の温度とほぼ同化して脱ぎ去る気持ちを揺らがせたが、意を決して頭から一気にするんと抜いた。引っ張っていた指の力を抜くと、ぱさ、と足の指すれすれのところに落ちる。丸出しになった肩やひじが冷気にくるまれて一瞬身をこわばらせたものの、選ばれた麻の洋服が被さるとすぐにそこに居心地を定めた。下半身も同じようにする。

◆記憶の部屋

◇全身

自分の身体の一挙一動、暮らしの中の出来事、家の中の物について、なぜ目を凝らし始めたのかという疑問は、直接的に「見逃してきたものに気付いたから」という答えにつながる。くらしは生活のすべてを疎かにしてきた。

ある時のくらしは、家から出るということが世界のすべてだと思っていた。人に会ったり、物を手に入れたり、お金を生むために働くことがつまり生きるということだと思っていた。自分という駒をいかに効率的に動かして、最大の喜びを得られるか。そういうことが何より大切だった。人生の中に、家の中の出来事は入ってこなかった。そうして過ごしていたある日、ぷつん、と電池が切れたように突然起き上がれなくなった。目を閉じた記憶のないまま眠り、気が付くと三日経っている、という出来事が頻繁に起きるようになった。くらしはその時もしかして、と思った。もしかしてこの自分の外側にある身体というものは、決して万全ではないのかもしれない、と。

身体に意識を向けてみたら、色々なことがわかった。大人たちがこの身体を大切に守ってきた時期があったこと、そしてもう自分しかこの身体の管理をできる人はいないのだということ。くらしはこの身体の中に、幼女や、少女や、老婆の自分を見た。そして、自分は同

じく男児でも、青年でも、老人でもあることを知った。過去も現在も未来も同じように引き受けて、くらしは毎日この身体で生きていたのだった。

◆玄関

◇全身

暗い玄関で靴に片足を途中まで差し込みながら、起きる、というのが行為の名前なのだとしたらここまでだ、とくらしは思う。身体が寝床の温度を忘れて、行動するために向かうすべての行動を「起床」と呼ぶのだ。

眠りから起床、というのをもう私たちは当たり前のように繰り返しているけれども、その間の期間は永遠にリハビリの時間だ。身体を動かすにも、何かを口に入れるのにも、どんな物体に触れるのにも。昨日の続きで今日が始まるわけではなくて、今日は今日の身体で世界と対峙しなければならない。そのことを忘れて、くらしはずっと遠くへ置いてけぼりにされてしまって、「起床」ができなくなってから初めて気づいた。

毎日の起床は、起きているようで、生まれ直しているのだと思う。朝は、生まれた後でも、死の前でもある。そのことを私たちは忘れてしまうことなく、毎日こうして繰り返すしかないのだった。生活の断片一つひとつに自然が隠れていたこと、生が隠れていたこと、きちんと少しずつ死んでいくこと。丁寧に暮らしていくこと。

ドアノブに手をかけて、くらしは大きく息を吸った。

さあ、今日も生活が始まる、とくらしは思った。

（完）